



TITLE:

# 京大上海センターニュースレター 第36号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科上海センター

---

CITATION:

京都大学経済学研究科上海センター. 京大上海センターニュースレター 第36号. 京大上海センターニュースレター 2004, 36

ISSUE DATE:

2004-12-21

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/26353>

RIGHT:

---

---

# 京大上海センターニュースレター

第 36 号 2004 年 12 月 21 日

京都大学経済学研究科上海センター

---

---

## 目次

○上海センター講演会のご案内

○シンガポール探訪雑記

+++++

### 上海センター講演会のご案内

日時 2005 年 1 月 24 日 (月) 14:00~16:00

場所 京都大学百周年時計台記念館 2 階国際交流ホール

演題 「最近の中国事情と今後の日・米・中関係における日本の積極的役割について」

講師 日中経済貿易センター名誉会長 木村一三氏

木村氏は、1954 年に故高碕達之助氏の紹介で日中貿易に参画され、日中国交正常化にも民間人として尽力されました。日中交流の最古参として故周恩来首相から胡錦濤総書記にいたるまで、中国側有力者と親密な友人関係をもたれています。奮ってご参加ください。

参加を希望される方は、北野([kitano@econ.kyoto-u.ac.jp](mailto:kitano@econ.kyoto-u.ac.jp) FAX:075-753-3492)までご一報ください。

---

### シンガポール探訪雑記

京都大学教授 田尾雅夫

11 月 1 日から 7 日まで、正確には 6 日の深夜過ぎまでシンガポールにいた。私にとっては初めてのシンガポールである。今回の滞在の目的は、医療システムの国際比較ということ、これは、大きな文脈でいえば、多摩大学の真野教授や名古屋大学の山内教授に同行した昨年末の渡米の延長線上にある。医療システムが、その社会や国家によってどのように影響を受け、異なるシステムを発達させるかということが、私たちのプロジェクトの主たる関心である。そのなかで、病院システムの相違を調べることに、新制度学派の組織論を、病院という組織に応用して、どれくらい説明できるかということが、私の担当である。この前のアメリカ行きは、医療に関しては抜群の、お二人のプロの先生の後についてまわる、いわば鞆持ち。それでも面白いほど、アメリカの医療事情が理解できた。日本のシステムはまんざら捨てたものではない、というのが、私の素朴な結論でした。今回は私ただ一人、心細いが何とかなるだろうという、生来のいい加減さでとにかく行くことになった。

滞在先はアレクサンドラ病院という、シンガポールでも 5 指には入るといふ大きな病院

に滞在した。資料室は勝手に使ってよいということだったので、かなり自由にさせていた  
だいた。中庭が大きく広く、まるで植物園のなかにあるような病院でした。リハビリには  
絶好でしょう。地理的にはシンガポール島の南半分のそれもありかなり南よりのほぼ真ん中、  
閑静な住宅街に位置している。市の中心、シティホールから西へ、地下鉄に乗れば7つ目  
の駅からバスに乗って、しかし、ほとんどは市のど真ん中のホテルからタクシーで往復し  
たので、それで通えるくらいの距離だと考えて差し支えない。

正規の＜学問的＞成果は、近々、ワーキングペーパーにまとめたいが、それよりもここ  
では、正式の記録として書けそうにない雑駁な印象を、以下で書きとめておきたい。

まず上海との印象の比較。よく似ている。やや白人が多いようであるが、それでもやは  
り東洋の都市国家との印象が、地下鉄で地上に上がった途端に焼きついた。中国系の人た  
ちが8割も占めるのだから当然といえば当然。それでも上海に比べると、やはり西洋に近  
いような気がしないではない。上海の南京東路と、ここのオーチャード・ロード、ともに  
もっとも大きなメインの通りということでよく似ている。歩いている人の感じはそっくり  
に近い。ニューヨーク、ボストン、シカゴ、デンバー、サンフランシスコ、ロンドン、シ  
ドニー、そしてメルボルン（私がブラブラと夜歩きした街）などに比べると、いわゆる東  
洋的な雑駁さの漂う街である。にもかかわらず、上海と比べて少し違和感が残るのはどう  
したことか。

意外に、という失礼かもしれないが、非常にきれいな街である。ゴミなどない、少し  
もないとまではいえないが、大阪的な雑駁さを内心期待していたが、案に相違して、非常  
に整理整頓された街である。品のよささえも感じてしまう。病院で私の世話をしてくれた、  
非常に気のいい青年に、そのことを話すと、きれいさをむしろ否定して、いやそんなこと  
はない、彼は日本のほうがきれいという（提携している東京の病院に研修に来ている）。し  
かし、私は、シンガポールの下町の隅を好んで歩いたが、それでも、その印象に大きく変  
わりはない。

しかし、私にとっては、上海のほうがなじみやすい。大阪を歩いている錯覚に落ちるこ  
とさえある。やはりシンガポールは、よくいわれるように人工都市だからか、とにかくき  
れいである。清潔にできている。毎朝、タクシーで病院まで通ったが、大きな公園の中を  
走っている感じだった。そのところどころに大きなアパートが建っている。公園都市とい  
ってもよいほどである。

国家的強権を発動すれば、これくらいの規模ならば、塵一つない、清潔な地方自治体を  
建設できなくはないということなのか。スラムなどないのではないか（なお、上海では汚  
い路地に迷い込んだことがあった）。小さな宇宙であれば、強権（いわゆる開発独裁）によ  
って一つの制度を完璧に普及させ定着させることができるのではないかと考えた。それ  
がよいかどうか、私には判断できない。政治学や行政学としては真剣に考えなければなら  
ないことではあろう。

くだんの青年は、リー・クアン・ユーはすばらしい政治家だといっていた。しかし、カ  
リスマによる属人的な国家は、そのうちやがてルーティン化する。そのときになって、薄  
汚れた街にならないことを願いたい。それでも、上海のような活気を残せば、それだけ  
もすばらしいことである。それにしても、私は、どちらかといえば上海のような東洋的雑  
駁さの街路が好きである。私の皮膚にしっとりなじむ。とくに夜、ぶらぶら歩くとその感  
がいつそう深くなる。そういえば、シンガポールには町のあちこちに、大小さまざまのホ  
ーカーズという独特の集合屋台があった。ホントに安い、しかしゲテモノ的（たとえば、  
カキ氷にかけける汁は甘臭い、ドリアンという果物の果汁が原料らしい）であるのは、その  
雑駁さをまだよく残している。やはり東洋の町だったのだ。

なお都市国家ではあろうが、地下鉄で北に行くと、途中から地上に出て、まだ熱帯性の

原生林が多く残っているのが車窓から見えた。次回は、時間さえあれば、あの近辺をブラブラしたいものである。マレーシアから通勤する人たちも多いとか（橋があるそう）。ところがマレーシアの虎に対して、シンガポールの表象はライオンとか、政治的にその辺は微妙らしい。時間があれば勉強してみたい。

単純に驚いたこと。昼ごはんは、ほぼ病院関係者の人たちと一緒にだったのだが、イングリッシュで話をしていたかと思うと、突然チャイニーズに替わって、またイングリッシュに突然替わったりして、ホントに面食らった。これが正真正銘バイリンガルかと思った次第。こういう自在変化の世界があるとは、私の世間はまだまだ狭いようである。また、最終日には時間が多少余ったので、空港に荷物をチェックインした後でまた引き返し、空港とダウンタウンの間にある砂浜のレストランでビールを飲んだ。ジョッキを3つもお換わりをした。この海の果てにインドネシアがあるのか、もしかして、このあたりが海賊の多いところかなどと、酔いにまかせて空想を逞しくもした。

毎度のごとく疲れた旅だが、それでも朽ちかけた頭を大いに刺激してくれた。